

## 『春日若宮社歌合』の諸相

藤 川 功 和

はじめに

『春日若宮社歌合』は、寛元四年（一二四六）十二月に催された歌合で、雪・恋・祝の三題三十九番からなる。出詠者は、知家（法名蓮性、本稿では底本の作者表記「入道正三位知家」に拠る）・真観・信実等二十六名。実際に神社で披講されたのか、又兼題か否か等、詳細は不明であるが、判詞について言えば、後述する如く先例を引用しつつ詳細な判を付している点等から後日判と思しい<sup>1)</sup>。一方、参加者の構成等から、反御子左派の旗あげの歌合と目される一方で、そういった位置づけに疑義を呈する説も存する<sup>2)</sup>。本稿では、知家の判詞や出詠歌の読み解きを出発点として、当該歌合の内幕について考えてみたい。

### 一 『春日若宮社歌合』概観

出詠歌人は、先行研究が指摘する如く、知家・行家・顕氏・重氏・尊家等六条藤家歌人と真観・鷹司院帥等からなる反御子左派歌人、信実とその子女為継・藻壁門院少将等中立派の歌人達を中心に構成されている。また、出詠者の内、祝部成茂、後鳥羽院下野、真観等は、承久の乱後、後鳥羽院が隠岐で没するまで「院を追慕し、その帰京までの団結を深め」ていたとされる「院近臣グループ」に属していたと目されている<sup>3)</sup>。福田秀一氏の人物比定を参照しつつ、当該歌合出詠者の勅撰集入集状況を確認したところ、論文末尾記載【別表】に示した如く、当該歌合催行時点で勅撰歌人となっていたのは、二十六名中、資季、藻壁門院少将、下部兼直、信実、真観、成茂、知家、下野の八名であり、それ以外は、殆どが『続後撰和歌集』以降に勅撰歌人となっている。また、当該歌合の後に催された

後嵯峨院政初発期の最初の大規模な公的催しとなる『院御歌合』並びに『宝治百首』への出詠は、信実、知家、下野の三名のみである。

一方、三題という題数は、多くの先行例がみえ、それらの中に当該歌合の三年前に催された『河合社歌合』も含まれる。『河合社歌合』は、「当時七〇歳に近い信実」が主催し、「家隆、後鳥羽院、定家が相次いで没した後、為家が歌壇の指導者としての地位を確立してゆくことに協力しようという信実の配慮」が背景にあるとされ、「新撰六帖題和歌とともに、為家・真観・連性がともに参加した最後の私的な催し」とされている（『新編国歌大観』解題）。

そこで、今一度両歌合を比較すると、もとより神社歌合で、出詠者とはともに二十人台（『河合社歌合』は二十人）、番数はともに三十三番台（『河合社歌合』は三十番）、そして催された時期も共に冬（『河合社歌合』は寛元元年十一月十七日）と共通点が多い。例えば、当該歌合と同時期には、寛元四年七月に為家が勧進し知家や光俊も詠進した「日吉社五十首」成立後、御子左派歌人の出詠が確認されない光俊勧進「住吉社卅六首」が成立しており、おそらく両歌合の似通いも偶然というより、催行に際してその中心をなしたであろう知家・真観等が『河合社歌合』を念頭に置いた上で、それとはほぼ同規模で催した可能性が存する。

## 二 知家判を読む——為家判との比較から——

では、当該歌合本文を具体的にみてみよう。まずは、知家の判詞からどういった特質がみてとれようか。

(1) 同字への対応

(資料1) 『春日若宮社歌合』雪・九番

九番

左 左近衛権中将藤原経定

人とはいひとひもせまし我宿のみちふりうづむ夜はのしらゆき

右 勝 鷹司院帥

みよし野の山にいる人道もあらじかつふりまさる雪のふかさに

左の哥、本の三句のうち、との字四かさなりてよろしからずや、基俊は鶴膝など、申して侍めり、ふるくもふかき難には申侍ざれど、又とがなきには似ずや、いかさまにも右哥、山にいる人みちもあらじかつふりまさるなど侍る、ことにをかしくて、雪のふかさもまさりてや侍らん

(資料2) 『春日若宮社歌合』雪・十二番

十二番

左 勝 尚侍家中納言

ふみつくる跡見まほしき人はこでさもいたづらにつもるゆきかな

あはれとも思はゞ人のとひてまし雪ふりつもるやどはいかにと

左右、心詞ことよろしくて、こなたかなたにおもひさだめず

侍を、猶さもいたづらにつもる雪哉、いとえんに侍うへに、右

哥をかしようは侍れども、との字五侍り、さきの番にこまかに申

侍り、かたぐ左可為勝也

〔資料1〕では、左歌について「と」字が上の句で四回繰り返される点を難じ、〔資料2〕では、右歌で「と」字が一首で五回用いられる点を非難しており、それらが難点と認定され、負けが付されている。福田氏は〔資料1〕を引用され「軽度の難としてゐるのが多いのではあるが、それにしても、為家に比べれば遙かにこの点に関心が深く、かつ病を好ましくないとしてみたことは、言へるであらう」と指摘される。

当該歌合の後例だが、為家が判者を務めた『院御歌合』では、下野詠「さみだれのふりにし友とかたらへばなれもこととふほととぎすかな」（五月郭公・三十六番右）で、「と」が一首の中で六回繰り返されているが、為家はその点を指摘せず、「右ふりにし友とかたらへばなれもこととふなどいへる、心かよへる所さるかたも侍りなん」と下野を勝としている。

廿九番

左 従三位藤原顕氏

君が代ながきたためしや春の日の名におふ山のみねのわか松

右 勝 左近少将藤原忠兼

三笠山君の御かけにさしそへて朝日夕日の千代もくもらじ

左右哥、祝言の心差別なく侍に、左調、の字五侍り、いかゞ、右哥、朝日夕日のちよもくもらじ、本哥をおもへる心よろしく侍べし、まさりてや侍らん

また、〔資料3〕では、知家は一首の中に「の」が五回用いられている点を難じているが、例えば『河合社歌合』で為家は二十五番左歌「人しらぬそでの雫やみちのくのはで忍ぶの山川の水」（成茂）について「左、いはでしのぶの山河も、心のおくしられてふかく見え侍るを」と表現の面で一定の評価を与えているが、「の」字が六回繰り返されている点については全く触れていない。同様に為家は、『院御歌合』七十一番右信実詠「おのづからさても」ぞみのおよぶやと雪の朝の野べに出でぬる」についても、「おもひかねたる雪朝の眺望哀にみなされ侍り」と、「の」の繰り返しについては言及しないのである。

但し、為家も同じ字の繰り返しについてある程度意識はしており、例えばは自詠「秋のよのなだかの浦のしほ風に影さしのぼる月の

さやけさ」(海辺月・六十五番)を負けとする理由として「右おなじ文字あまりにおほく侍るにや、うた合にはとがめたることも侍れば、尤まけ侍るべし」と記している。「うた合にはとがめたることも侍れば」というのが為家のスタンスであり、この点厳密に同字の繰り返しを指摘する知家とは対照的である。

(2) 先行歌の指摘

(資料4) 『春日若宮社歌合』雪・十番

十番

左

散位藤原行家

都にはしぐる、雲のたえまより山の端みればふれる白雪

右

日吉禰宜祝部成茂

たづぬき友まつ雪のきえがてにいましもつもとしのくれ哉

右歌、たづぬべき友待雪の消がてに今しもつもる年の暮かな、

まことに宜く、左歌にはこよなくまさりてぞ侍める、抑前藤大

納言寛喜の比ほひ、百首を人々よませられしに、此右哥見し心

ちし侍り、同作者よもぞ二度はとりいだし侍らじ、耄のあまり

にひがおほえにてぞ侍らん

知家と為家の判詞における違いは、先行歌の指摘にもみてとれる。例えば、(資料4)で知家は、成茂詠について、まず冒頭で「まことに宜く」「こよなくまさりてぞ侍める」と絶賛した上で、傍線

している。

(資料5) 『春日若宮社歌合』恋・十六番

十六番

左勝

従三位藤原顕氏

逢と見るその面影もいたづらにさめてはかなきうた、ねのゆめ

右

左近衛権少将藤原忠兼

須磨の海士のしほたれ衣きもせぬに人をうらみの波ぞかけ、る

右哥、授本マコトの歌に、露わけむきもせぬにといふ哥に相似て侍う

へに、禪定殿下の建保の御百首の御詠に、須磨のあまのしほ焼

衣をのれのみなれてもかゝる袖の波かな、心詞かはらずや侍ら

ん、左は、又めづらしからねど、又さしたる難には見及侍ら

ず、可勝か

(資料6) 『春日若宮社歌合』恋・十七番

十七番

左勝

権大僧都尊海

あぢきなく暮る夜(わび)ことに待びてははむなしき床の独ね

右

権大僧都尊家

ほにいづる尾花がもとのおもひ草たが心よりたねをまきけん

右歌、思草、新勅撰に隆房卿哥云、人しれぬ憂身にしげきおも

ひ草思へば君ぞ種はまきける、かはれるふしなく侍り、左は、

ことなるとがなくや侍らん、すくよる(ま)ならで物語の(マツ)などを見る

心ちぞし侍れど、まさるとや申侍べき

当該歌合判詞における先行歌の指摘の他の例として、(資料5)で知家は、忠兼詠について、『古今和歌六帖』所収歌「なつぐさのつゆわけごろもきもせぬにわがころもでのかわくときなき」(「夏ごろも」・三二九一)や、『続千載和歌集』所収歌で現在では散逸した建保年間「光明峯寺撰政家百首」の九条道家出詠歌「すまのあまのしほやき衣おのれのみなれてもかかる袖の浪かな」(恋歌三・「家に百首歌よみ侍りける時、恋を」・一三八二)との似通いを指摘する。さらに、(資料6)では、尊家詠が『新勅撰和歌集』入集隆房詠「ひとしれぬうき身にしげきおもひぐさおもへばきみぞたねはまさける」(恋歌二・「女につかはしける」・七七四)と似通っており「かはれるふしなく侍り」と難じている。(資料5)(資料6)で知家が指摘する先行例がいずれも他資料から確認されることから、おそらく(資料4)成茂詠についても、具体的な資料があった上での指摘と考えられる。

一方、為家の場合、「よこ雲の霞にまがふ山かづら眺かけて春はきにけり」(「院御歌合」早春霞・十二番左・経朝)に対して、順徳院詠「あら玉の年の明行く山かづら霞をかけて春はきにけり」(「紫禁和歌集」「同比、二百首和歌」・七三〇、※「同比」は前の詞書きから、建保四年(一一二六)と推定される)の本文を、「左歌はとしを明けゆく山かづら霞をかけて春はきにけりとて、ちかきよに見

侍りしにや」と判詞で具体的にあげているにもかかわらず、それが誰のいつ頃の詠なのかは明示せず、「ちかきよに見侍りしにや」と記すにとどめている。

『院御歌合』からもう一例示そう。雅光詠「おもひつづくいとせばに朽ちぬらん忍ぶのうらのあまのたくなは」(忍久恋・八十五番左)の下旬について、『新古今和歌集』入集の二条院讚岐詠「うちはへてくるしき物は人めのみしのぶのうらのあまのたくなは」(恋歌二・一〇九六)を念頭に置いた上で、「下の句やもし、ちかきうたに侍りけん」とのみ為家は指摘する。

福田氏は「反御子左派の歌評態度は、為家に比して遙かに理知的・客観的であり、時には術学的とも思はれる程好学的であり、従つて過去の歌合の判や証歌・類歌等を頻りと用ゐて、勢ひ判詞は博引傍証、長文に互る場合が多いのである。この傾向は、真観・知家の両將に特に著しいところである」と指摘されているが、「春日若宮社歌合」の判詞を当該歌合前後の為家判と比較しつつ読み直すと、福田氏の指摘があらためて首肯され、知家・為家双方の判詞の書きぶりが極めて対照的であることが再確認されるのである。

ここまで知家の判詞を為家の判詞との比較も交えて読んでみた。先学の指摘の如く、為家を取り立てて問題としない点や、為家がオブラートに包むような言い回しで指摘する先行歌との表現の似通いについて、知家はいつぐらいの時期の誰の詠なのかを明確に指摘

し、時には成茂の如く、当該歌合以前に一定の評価を得ていたと思しい歌人<sup>8)</sup>に対しても、「同作者よもぞ二度はとりいだし侍らじ、毫のあまりにひがおぼえにてぞ侍らん」と、皮肉を交え難じている。こういった知家判の書きぶりは、為家判と見比べた時、その違いがより鮮明に浮かび上がってくるのである。

### 三 知家出詠歌を読む

(資料7) 『春日若宮社歌合』雪・十三番

十三番

左

入道正三位知家

まつち山待ほどひさに人もこそ雪ふか、らしきへのかよひ路

右 勝

下野

消あへぬ友待がほに風さえてこほりはてたる庭のゆきかな

左哥、させる事なく侍り、ひさにもき、よからずや、右哥、友

まつ雪はふるき歌にもあまた侍べし、但上句をうちき、たるに

は、何の友待ともきこえぬやうにや侍らん、然共、氷はてたる

庭の雪哉と侍る、いひなれてをかくこそ聞え侍れ、返々右勝

にて侍べし

次に知家の出詠歌に注目してみたい。(資料7) 知家詠では、傍

線の表現が「あさもよし 紀伊へ行く君が 真土山 越ゆらむ今日

そ 雨な降りそね」(『万葉集』巻第九・「後れたる人の歌二首」・

一六八〇)を、その源泉としている点に注意される。<sup>9)</sup>

(資料8) 『春日若宮社歌合』恋・二十六番

廿六番

左

入道正三位知家

玉の緒をくやしやあはによりつめてあひてもあはぬ人をこふらん

右 勝

下野

くるれどもむなしき空をいくかへりおもひしらではながめかぬらん

左、玉緒めづらしきふしも侍らず、あひてもあはぬも心えがた

ささまなり、右、むなしき空をいくかへり思ひしらではながめ

かぬらんこそ、ことにをかくきこへ侍れ

同様の例は、(資料8) 恋題詠にも確認され、傍線の表現は、『万

葉集』所載「玉の緒を 沫緒に搓りて 結べらば ありて後にも

逢はざらめやも」(巻第四・「紀女郎、大伴宿祢家持に贈る歌二首

女郎、名を小鹿といふ」・七六三) 歌を、その源泉としている。

(資料9) 『春日若宮社歌合』祝・三十九番

卅九番

左 勝

入道正三位知家

わが君にゆきあひどの、神なればさぞなかしき代をまもるらん

右

下野

春日山しられぬ谷の埋木もえ出る春にいまやあひみん

左哥、ゆきあひどの、神、ことかくしからんとは思へども、さ

せる事なく侍り、右哥、優艶に侍を、はるをむかへて草木のもへいでん事は、祝言ならずとも侍べし、あやまりて、しられぬたにの埋木と侍る、述懐の哥などや申つく侍らん、いかゞ

一方、祝題では「ゆきあひどの」と、先行例が確認されない表現を用いている。この用語は同じ知家詠「かすがなるゆきあひどのにおく霜のふりていくとせ神さびぬらん」(『夫木和歌抄』雑部十六・一六〇一三・「社霜を、明玉」、※詞書から、知家撰の散逸私撰集『明玉集』所収歌と確認される)にみえる。

このような『春日若宮社歌合』出詠歌における知家の特色、すなわち、『万葉集』の積極的撰取、先行例をみない表現の積極的使用は、福田氏が指摘する反御子左派の歌風の大きく分けて四つある特質の内、「(一)語法・表現の自由・新奇を狙ひ、ために若干晦渋・奇措に走る場合のあつたこと」、「(四)万葉をかなり尊重し、万葉歌を本歌に取る場合の多かつたこと」と一致しよう。なお、当該歌合にみえる知家詠の特色は、『河合社歌合』出詠歌には確認されない<sup>⑩</sup>。

一方、「春日若宮社歌合」の翌年成立の『院御歌合』においては、「尋ねきていまぞしめゆふたまだすき雲ある山のはつ桜花」(山花・二十三番左)——「思ひ余り いたもすべなみ 玉だすき 畝傍の山に 我標結びつ」(『万葉集』巻第七・「山に寄する」・一三三五)、「時鳥いかであやめにひきそへてながなく音をもたまにぬかまし」(五月郭公・三十六番左)——「ほととぎす いたくな鳴きそ 汝が

声」五月の玉に あへ貫くまでに」(『万葉集』巻第八・夏の雑歌・一四六五・藤原夫人)・「ほととぎす 待てど来鳴かず あやめ草 玉に貫く日を いまだ遠みか」(『万葉集』同・一四九〇・家持)、「天川かはかぜすずしとほづまのいつかと待ちし秋やきぬらん」(初秋風・四十九番左)——「年にありて 今かまくらむ ぬばたまの 夜霧隠れる 遠妻の手を」(『万葉集』巻第十・秋の雑歌・二〇三五)、「すがのねのしのびにむすぶしたひものとけずや恋ひむとしはへぬれど」(忍久恋・八十八番左)——「(前略) 千鳥鳴く その佐保川に 石に生ふる 昔の根取りて しふ草 (後略)」(『万葉集』巻第六・雑歌・九四八・「四年丁卯の春正月、諸王・諸臣子等に勅して、授刀寮に散禁せしむる時に作る歌一首」)・「昔の根のねもころ君が 結びたる 我が紐の緒を 解く人はあらじ」(『万葉集』巻第十一・物に寄せて思ひを陳ぶる・二四七三)・「我妹子し我を思ふらし 草枕 旅の丸寝に 下紐解けぬ」(『万葉集』巻第十二・羈旅にして思ひを発す・三一四五)の如く、「春日若宮社歌合」と同じく『万葉集』撰取の傾向が看取されるのである。この点に関連して、岩崎禮太郎氏は、「内裏名所百首」、「洞院撰政家百首」、「宝治百首」における知家の「古典撰取」を調査され、「建保期と貞永期には三代集の撰取が多かつたのに、宝治期になると急にそれが減じて、万葉歌の撰取が急増している」と指摘された上で、「(知家は、稿者注) 寛元四年(一二四六)頃から御子左派に反旗をひるが

えした。その頃から知家は、万葉集を尊重する父祖の家学に目ざめ、万葉歌をふまえた歌が急激に増加するとともに、三代集からの撰取が急激に減少したのである」と指摘されており、今回の調査結果と軌を一にする。

また、知家詠に看取された傾向は、同じく反御子左派の真観にも確認され、「神さぶるならのたむけに見るまでにさほすぎゆけばみゆきつもりて」(雪・六番—「佐保過ぎて 奈良のたむけに 置く幣は 妹を目離れず 相見しめとそ」(『万葉集』巻第三・雑歌・「長屋王、馬を奈良山に駐めて作る歌二首」・三〇〇)、「月影もはやかたぶきぬ我せこがこんといひしはあらぬ夜はかも」(恋・十九番)にみる如く当該歌合においては、『万葉集』を源泉とする表現が散見するのに対して、『河合社歌合』出詠歌には顕著には見出せないのである。このように反御子左派の両巨頭の出詠歌は、『河合社歌合』と『春日若宮社歌合』において同様の傾向をみせているのである。

#### 四 『春日若宮社歌合』の祝題詠と下野

ここまで、『春日若宮社歌合』における知家の判詞や出詠歌にみえる傾向を、『河合社歌合』、『院御歌合』との比較も交えつつ読み進めた。知家は、為家とは明らかに異なった判詞を記し、出詠歌においても自身の歌風の特徴を強く打ち出していた。すなわち、知家

は、判詞と出詠歌の両方で、自身の目指す和歌の有り様を繰り返し提示しているのであり、こういった事象は、当該歌合を反御子左派の旗あげの歌合と位置づける従来の指摘と、相容れるものと言えよう。

ところで、当該歌合の題に「祝」があるが、実作をみてみると、「うごきなき世」「いく万代」(二十七番左右)、「千とせの松」「君がや千世」(二十八番左右)、「君が代のながきためし」「千代もくもらじ」(二十九番左右)、「ひさしき御代」「ながきちぎり」(三十番左右)、「君が代をいのる」「千代のためし」(三十一番左右)、「千代のよそひの」「やすらげき世」(三十二番左右)、「いく万代」「ながきためしの君が代」(三十三番左右)、「千世のゆくすゑ」「いく万代をちぎる」(三十四番左右)、「おさまれる代」「万代」(三十五番左右)、「よろづ代」「千世の光」(三十六番左右)、「わが君の御代はつきせじ」「万代かけて」(三十七番左右)、「よろづ代までに」「いく千世とかぎりもあらじ」(三十八番左右)、「かしこき代をまもるらん」「もえ出る春」(三十九番左右)と、殆どの詠者が治世への祝言を詠み込んでいる。これは、具体的には本年正月に四歳の後深草天皇に讓位し、院政を開始した後嵯峨院に対してのものであろう。

先行例では、建久二年(一一九二)三月『若宮社歌合』(三題)「山居聞鶯・松間梅花・寄祝言恋」・四十八番・九十六首・三十二名)、正治二年(一二〇〇)「石清水若宮歌合」(五題)「桜・郭公・月・



雪・祝」・百六十五番・二百三十首・六十六名) 等で祝(を含んだ)題が設定されており、それらの出詠歌をみると、治世(具体的には後鳥羽天皇《院》)への祝言を含んだ詠が散見する。<sup>13)</sup>

また、祝題ではないが、元久元年(一一〇四)『春日社歌合』(三題「落葉・暁月・松風」・四十五番・九十首・三十名)の松風題詠に、「君が代はやはよろづ世とさしつなりみかさの山のみねの松風」(二番右・俊成)、「千世までと君をいのればしめのうちのしのでこたふる嶺のまつかぜ」(四番左・忠経)、「かすが山みねのあらしも君がため松にふくなる万代のこゑ」(八番左・俊成卿女)、「万代のすゑもはるかにきこゆなりかすがの山のみねのまつかぜ」(九番左・越前)、「かすが山まつふく風も君がため千とせの声にかぎりしられぬ」(十番左・定家)、「きみがためふりさけさけはかすがなる山もちとせを松の風かも」(十二番左・雅経)等、「(後鳥羽・稿者注)院に対する祝意」が集中してみえることが指摘されており、当該歌合の祝題詠に看取される傾向は、先行する神社歌合にも確認できるのである。

さて、祝題詠をさらに細かくみてゆくと、知家と番えられた下野詠に注意される。前掲(資料9)祝題の下野出詠歌「春日山しられぬ谷の埋木ももえ出る春にいまやあひみん」の内、「谷の埋木」は、「としふれど人もすさめぬわがこひやくち木のそまのたにのむもれ木」(二度本『金葉和歌集』恋部上・三三三・「恋の心をよめる」・顕輔)、

「みな人はよしののやまのさくらばなをりしらぬ身やたにのむもれ木」(二度本『金葉和歌集』雑部上・五二三・「山ざとに人人とまかりて花の歌よみけるによめる」・源定信)、「思へどもいはでの山に年をへてくちやはてなん谷の埋木」(千載和歌集』恋歌一・「百首歌たてまつりける時、恋のうたとてよみ侍りける」・六五一・顕輔)、「花さかでいく世のはるにあふみなるくち木のそまのたにのむもれ木」(新勅撰和歌集』雑歌四・「題しらず」・一三〇七・雅経)等、雑歌や恋歌には例がみえるが、祝歌にはそぐわない表現であり、知家は当該歌を「しられぬたにの埋木と侍る、述懐の哥などや申つく侍らん」と指摘する。<sup>3)</sup>

「谷の埋木」が祝題にふさわしくない表現であることは、新古今時代から歌作に及んでいた下野なら当然知っていたと思しく、先述した元久元年『春日社歌合』出詠歌「春日山みねのまつが枝さらにまたけふよりならず千世の初かぜ」(松風・九番右)や、「千とせへむながれもしるし石清みづにこりなきよの末もあらはる」(院御歌合』社頭祝・百廿七番右)等、下野自身『春日若宮社歌合』前後の歌合においては、セオリー通りに祝言を詠み込んでいる。つまり、下野は、当該歌合において、敢えて自身を「谷の埋木」に見立て、「もえ出る春に」(後嵯峨院政に)、「いまやあひみん」(その威光に浴したい)と訴えているものと思われる。

ところで、「谷の埋木」という表現は、元久元年『春日社歌合』

松風題において、家隆も「かすが山たにの埋木くちぬとも君につげ  
こせみねの松風」(十番右)と詠んでいる。ちなみにこの時は衆議  
判で、執筆は定家、判詞には「右歌尤宜、為勝」と記されており、  
家隆は勝となっている。この歌合には後鳥羽院も参加しており、家  
隆は院に読まれることを意識した上で、意図的に「たにの埋木」と  
詠んでいるものと思われる。実は、下野の夫源家長が記した『源家  
長日記』は、この『春日社歌合』に触れ、この時後鳥羽院の観感に  
与った歌人の一人として家隆の松風題詠をあげている。そして、こ  
の家隆詠は後に『新古今和歌集』(雑歌下・「春日社歌合に、松風と  
いふことを」・二七九四)に入集するのである。五味文彦氏は、「下  
野の歌も、知られているのはこの春日社の歌合に始まっており、こ  
の歌合は下野兄妹にとつて極めて重要な歌合であった」と指摘され  
るとともに、「女性歌人が少ないなかで新たに迎えられた下野に対  
し、後鳥羽院の周辺の動きを詳しく説明する」ことが、『源家長日  
記』執筆の目的の一つとされている<sup>16)</sup>。

さて、下野自身の孤独感、不遇感を重ね合わせたような詠は他の  
二題にも確認される。その内、前掲(資料7)雪題詠「消あへぬ友  
待がほに風さえてこほりはてたる庭のゆきかな」では、「友待がほ」  
なる「庭のゆき」が「こほりはて」る趣向だが、判詞が「友まつ雪  
はふるき歌にもあまた待」と指摘する内の一首と思われる『後撰和  
歌集』所収貫之詠「ふりそめて友まつゆきはむばたまのわがくろか

みのかはるなりけり」(冬・四七一・「雪のあした、おいをなげき  
て」)の如く、「友待ちがほ」で「こほりはて」た「庭のゆき」に  
は、友人を待った挙げ句訪れがついになかった視点人物の心情も含  
まれていよう<sup>17)</sup>。

また、前掲(資料8)恋題詠「くるれどもむなしき空をいくかへ  
りおもひしらではながめかぬらん」の傍線部は、例えば、土御門院  
の承久の乱後の詠「ちぎりても空ゆく月のいくめぐりむなしき秋を  
すぐしきぬらん」(『土御門院御集』詠三首和歌承久四年八月十五夜・  
「月前久恋」・一八三)に同様の表現がみえる。下野詠は、一義的に  
は、(資料6)掲出尊海詠「あぢきなく暮る夜ごに待びては(わ)  
むなしき床の独ね」(恋・十七番左)の如く、恋人を待ち続ける女  
性の心情を詠んでいるように解されよう。只、尊海が「床」を詠み  
込み、恋人を待つ女性の姿を定型的に詠んでいるのに対して、下野  
はあえて「床」といった表現を用いずに詠んでいる点や、或いは判  
詞にみえる「ことをかしくきこへ侍れ」という評価に繋がってい  
るのかもしれない。一首としては恋の状況に限らず解せるものとな  
っており、また視点人物が「待つ身」である点は雪題詠と共通す  
る。

下野は、寛喜四年(一一三三)三月『石清水若宮歌合』、同三月  
『日吉社撰歌合』、同七月『光明峰寺撰政治家歌合』、同八月『名所用  
歌合』、嘉禎二年(一一三六)七月『遠島御歌合』等への出詠が確

認められ、また、先述の如く後鳥羽院近臣グループに属し、一連の和歌活動を展開していたことが先学によって指摘されている<sup>(18)</sup>。一方、本歌合の下野出詠歌が、孤独感や沈淪意識といったものを読み取ることも可能な詠で構成されていることから、「遠島御歌合」以降、ささやかな和歌活動はあつたにせよ、例えば同胞の成茂は出詠している『河合社歌合』において下野の名はみえないのであり、当該歌合のような催しへの出詠は、久々のことではなかったかと推測される。祝題に確認されるような、あからさまな述懐詠からは、自身の不遇を訴えんとする下野の姿勢が看取されるのである。

### おわりに

本稿では、『春日若宮社歌合』の位置づけを考える手だてとして、まず、知家の判詞や出詠歌を、為家や真観らの判詞や和歌と比較しつつ検討を加えた。為家の判詞とは対照的な書きぶりや、従来指摘されているような反御子左派的和歌表現が確認され、嘗て『河合社歌合』に参加し為家の判を受けた知家や真観が、独自性を打ち出すことを意識しながら当該歌合に臨んでいたであろうことを再確認した。

一方で、当該歌合の祝題詠をみると、治世への祝言が濃厚であり、それらは先行歌合に例を見出せるものであり、当該歌合が後嵯峨院政への祝言を表明する場でもあつたことを確認した。さらに、それら出詠歌を細かくみると、下野が私的な主張を織り交ぜた詠を

提出していることが確認され、特に、嘗て自ら出詠し、また、夫の遺した日記にも綴られた、元久元年『春日社歌合』におけるエピソード——(他の歌人が後鳥羽院への祝意を主題として詠む中、家隆が敢えて自身を「たにの埋木」と表し、結果的に後鳥羽院の叡感に預かった)を踏まえるかのような詠は注目される。

当該歌合の中心メンバーと目される知家や真観に、為家を意識したような事象が確認されることから、先行研究の指摘する反御子左派の旗あげの歌合という側面を、当該歌合はたしかに有していたと思われるが、一方で、本稿で確認した如く、後嵯峨院政への祝言を表明する場としての側面が見出せるとともに、さらに、下野詠からは、自らの不遇を訴える場としても当該歌合が機能していた可能性も認められる<sup>(20)</sup>。本稿で取り上げなかった歌人の分析も含め、今後さらに検討を重ね、当該歌合の諸相を探ってゆきたい。

※『春日若宮社歌合』本文は、宮内庁書陵部蔵本(紙焼き写真)に拠り、適宜、読点、濁点等を私に付した。当該本には、誤写や誤脱が想定される箇所が見えるが、当該歌合は書陵部蔵本が唯一の写本である。よって本文に不審のある箇所は、「新編国歌大観」も参照しつつ、本文右傍の( )内に校訂案を示すか、ママ注記を施した。なお、『春日若宮社歌合』は、「桂宮本叢書」第十四輯にも活字化されている。その他の和歌本文の引用は、原則として「新編国歌大観」に拠った。但し、『万葉集』は、塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。また、引用本文には適宜傍線等を付した。



かしょう侍を、すさめぬは病にや侍らん、勝負各の御はからひにて侍べし」  
と、判詞からは勝負が明確には解せない。

(7) 当該歌は、『新古今和歌集』(恋歌五・一三七五、四句目)「などわがそでの」に人麿詠として入集する。なお、原歌は『万葉集』に「夏草の露別け衣 着けなくに 我が衣手の 乾る時もなき」(巻第十・夏の相聞・「露に寄する」・一九九四)とみえ、知家が判詞で念頭に置いたのは原歌ではないと思しい。

(8) 『源家長日記』は、妻下野の同胞成茂の詠が後鳥羽院の観感に与つた逸話を伝える。

(9) 他に「住の江の松ほどひさになりぬればあしたづのねになかぬ日はなし」(『古今和歌集』恋歌五・七七九・「題しらず」・兼覧王)の影響がみえる。

(10) 知家の『河合社歌合』出詠歌は「神代より霜ふりおける真櫛のいやとしのほにすめる月かな」(冬月・二番右)、「行帰るかも河原の友千鳥しらしな月に祈る心は」(千鳥・十二番右)、「風あらし浦の苦やにたつ煙心やすくはなびきやはする」(不遇恋・二十一番右)の三首。

(11) 「知家の歌における古典撰取の様相と変遷」諸歌人との対比において「『日本文学研究』二十二号 昭和六十一年十一月」。

(12) 真観の『河合社歌合』出詠歌は、「起き出でて又こそみつれ冬の夜にさえかへりたる山のはの月」(冬月・二番右)、「神さぶる糾の杜の夕千鳥川瀬をかけて鳴きわたるなり」(千鳥・十二番右)、「身は捨てつ今は此世に逢ふ事を何にかへてか恋渡るらん」(不遇恋・二十二番右)の三首。

(13) 「ちよまでとせめては君をいのるかなあひもやすと心ながさに」(若宮社歌合)「寄祝言恋・六番右・季敏」、「君が代のためしにひきし呉竹のひとよもいに逢ふよしもがな」(同・十五番右・性照)、「うきなきはこやの山にいづる日は思ふもひさし万代のかげ」(「石清水若宮歌合」祝・

十七番右・経通)、「を」とこ山梢を風はわたれども枝をならさぬ君が御代かな」(同・廿三番左・知家)等。

(14) 谷知子氏「後鳥羽院と元久元年十一月十日「春日社歌合」」(『明月記研究』10号 平成十七年十二月 参照)。

(15) 前掲(8) 参照。

(16) 『源家長日記』と『無名草子』—仮名の書物史—(『明月記研究』8号 平成十五年十二月) 参照。なお寛元四年は家長の十三回忌にあたり、為家は「法花経序古品 欲説大法雨、寛元四年前但馬守家長朝平三年結縁経」として「またしらぬ空の光にふる花は御法の雨のはしめなりけり」(『大納言為家集』一五七七、本文は「私家集大成」と詠じている)。

(17) 新大系当該歌脚注(片桐洋一氏)は、「詞書によれば歌老の歌だが、[友待つ]ということ併せて言いたかった作者の気持を感じとらなければ以下の贈答はわからない」とする。

(18) 安井久善氏「後鳥羽院下野」攷(『語文』八号 昭和三十五年五月)、藤平氏前掲(3) 論文参照。

(19) なお、『源承和歌口伝』は「万葉集歌とる事」の項で知家、真観の詠を例にあげている。また、前掲(11) 論文で岩崎氏は、『宝治百首』における知家の『万葉集』撰取について、本歌取り十五例、万葉語使用十二例とされる。

(20) 当該歌合が当時どの程度享受されたのかという点は、今後さらに調査したい。ちなみに、後嵯峨院政期の勅撰集『続後撰和歌集』、『続古今和歌集』には当該歌合出詠歌は入集していない。なお、『続古今和歌集』に入集がみえない点は、谷山悦子氏「続古今集の基礎的研究」(『同志社国文学』一号 昭和四十一年三月)に指摘がみえる。

一方、位藤邦生氏は、『院御歌合』における承明門院小宰相詠に「個人的な事情も含めながら後嵯峨院政を寿ぐ姿勢を見せ」ようとする意識を

看取される（和歌の読解と作歌環境―『院御歌合』を例にして―）（『国語と教育』第三十二号 平成十九年十一月）。当該歌合においては、下野の他にも、藻壁門院少将詠に「わきて猶雪ふるみちのかなしきは世にすみがたき山辺なりけり」（雪）とみえ、知家は「右哥、いとをかしく侍に、述懐の心なり」と評している。このような事象が、単に個人的な閱歴によるものなのか、当時の歌合における女房歌人の位置や役割と連動するものなのかという点についても、田淵句美子氏「歌合の構造―女房歌人の位置―」（『和歌を歴史から読む』平成十四年 笠間書院）、渡邊裕美子氏「女の歌詠み」の存在形態―『八雲御抄』に探る―」（『明月記研究』7号 平成十四年十二月）等の研究業績を踏まえながら今後さらに検討する必要がある。

〔付記〕本稿は、平成二十一年度尾道大学学長裁量教育研究費、研究テーマ「宝治元年『院御歌合』注釈を通じた鎌倉時代中期の（政治と文学）に関する総合的研究」（代表者 藤川功和）による研究成果の一部である。

―ふじかわ・よしかず、尾道大学芸術文化学部専任講師―